硯 2

横浜より　隠居大夫様
進まいらせ
お冬のを見すかして
毎しゆみなんかみなさま
昨日御使冊しりき
そなたスッパヌキを贈して
ますましこよ喜び
まだ候　お目もじ
一件まで　自分で
たバスキて此ときは

[illegible]
一件まで自分で
たゞパスさせてゐる事は
事ある遠山が擔雪
なでゝぬのしぬ氣持
の樣子ぬのゝは藤
隠宅と芭蕉
ゐるしるん、この
話も美少くなる
いづく云ふる口出
来て ― 立てい
やのぶこの ― 自分
でスッパヌクがれん
ほろけ地すると極
ゆめり、社友の甫
は泥ぬりのゝ傍
落書の旅行
思ふしく限りを書て
すんだ詩の眉を暗
すべき ― 縁よ
彼はあるも遠山和擔雪
者あぜし云ふ故
山堂眞あるけん

猿は　事あるも　妹山ぶ檜ん
南無さし　之れ　故
山堂　真ならけれ
此度　何のう三郎候う
来香よ
高へ、迷惑なんて　すず
此身　今日の仁王ぶ
閑を見たんの
加
傑　華◎◎
けいけ　すん
とかしずや　さんでも
是も獣　かすらに
一之介の　怪ろの、悍の
一つやぞつ　けろ！、
無せる　鬼例の
霊物　なかすの　枕は
迷山大　好手の如　かすの
現ん　積風
ゆきのけ　なしの　かり
穴得　富幽
みよ

とおしずや　さんでも
鬼も酔ひ汗すらに
一元谷の怪ろを、悍の
一つやっけろ！
無きる鬼ノ例の
豪気もなさる持は
近山大好きの中かげ
現れし　積見ぶ
吹きのけなしのぞり
究明に宙断
ばかな
三年四
於那覇出
琉国王
亜心徒
小冊の
自家解
[illegible]

巌谷小波書簡
江見水蔭宛
本間文庫
文庫 14
C415

巖谷小波書簡　江見水蔭宛

本間文庫
文庫 14
C415